

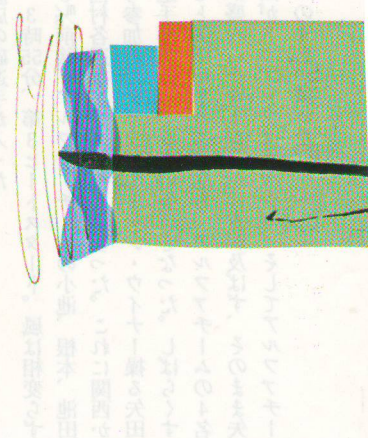


1st JAPAN OPEN BOARD SAILING REGATTA '82

9th-11th OCTOBER / CHIGASAKI BEACH-SHOHNAN

日本でも確実に広がっているオープン化の波。
海外からの招待選手も迎えて行なわれた
本格的なオープン・レガッタ

第1回ジャパン・オープン・ ボードセイリング・レガッタ'82



根本秀人(オープン)とバムルーン・ラムサップ(デイビジョンI)が総合優勝

10月9日、湘南・茅ヶ崎海岸に117名のセイラーが、第1回ジャパンオープン・ボードセイリング・レガッタ'82に集まった。オープントラースのレースは今まで行なわれていたことは行なわれていたが、ほとんどが湘南地区のみで、ローカルの色彩の強い大会であった。それだけ地方に各種のボードが普及していなかった訳だが、今回の大会には、南はヨロン島から北は金沢まで、そして関西、静岡、茨城など全国的な規模で選手たちがエントリーしてきた。また海外から招待選手と



今回で5度目の来日のバムルーン・ラムサップ。デイビジョンIのクラスで愛艇キングコブラを操り総合優勝を飾った。オープントラースは中央大学の根本秀人が優勝。

してリサ・ニューバーガー(アメリカ)とバムルーン・ラムサップ(タイ)の2選手が出場した。リサは弱冠17歳。ポスト・ロンダ・スミスの第1番手として注目を集めているキュートなセイラーだ。バムルーンは、もうすでに日本でもお馴染みのセイラー、今回で5度目の来日になるタイのチャンピオンである。

オープン・レガッタということで、集まった艇種も数多く、その数はカスタムボードを含め27種類、現在日本で購入できるほとんどのボードがこの大会に集合したと言える。これらのボードはデイビジョンIとオープンの2クラスに分けられ、デイビジョンIには、ウインドサーファー、モルフォサーフアー、キングコブラ、ソニックボード、スターボーン、ハイフライ555などが属し、その他ホワイトイーグル、アルファファントム、デューフォーケンウイナー、マグナムプラスなどはオープン・クラスであった。

レースの方は両クラス合同で行なわれ、インズアウト4ヒート(予選3、決勝1)、トライアングル2レース、ロングデイズタンス1レースで順位が競われた。この結果、デイビジョンIの総合はインズアウトとトライアングル第1レースでトップを取ったバムルーン・ラムサップが優勝、ロングデイズタンスでトップフィニッシュを飾った大石美佐男が2位、インズアウトにはエントリーしなかった柴崎政宏が3位に食い込んだ。オープンクラスは、数々の強豪を抑えて中大の根本秀人がコンスタントな成績で優勝、2位にはトライアングル第2レーストップの小池慶一が、3位にはトライアングル第1レースで1位だったリサ・ニューバーガーがそれぞれ入賞した。

(注)デイビジョンIとIIの大きさは違いは厚さ。Iは165mm、IIは220mmがマキシマムである。

インズアウト 10月9日(土) 決勝ヒートはそれにふさわしい 白熱のレースだった。

パナムカップで採用されているということと有名なインズアウトという競技は、日本でもあまり行なわれていない。昨年日立で行なわれた全日本選手権、まだ記憶に新しい新潟でのジャパンカップぐらいだろう。両大会ともグレンドがウェイブ・ポイントという理由でこの競技を行なったのだが、今大会も湘南有数のサーフポイントである茅ヶ崎海岸が会場ということ、この競技が行なわれた。インズアウトとは波の立つ海面のインサイドとアウトサイドにマークを設置、この2つのマークを何周も(今回は3周)廻航する競技で、ウェイブをいかに利用するか、その巧拙が勝敗に大きく影響するウインドサーフィン独特の種目である。

大会前日、10月8日夜半に関東地方の沖合を駆け抜けていった台風21号の影響で、波、風ともに好コンディションが期待されたが、どうしたことか海面は鏡のようにフラット。このビーチでは考えられないような状態だった。幸い風は浜で6〜8%、沖合では10%以上吹いていたが、インズアウトに必要なサイドシヨアではなく完全なオフシヨアだった。このため、2つのマークは1つが本部前、1つが江ノ島方面という海岸線にはほぼ平行に打たれ、インズアウトと呼んでいいやら悪いやら、うねりを横から受けるという不思議なインズアウトとなってしまった。

台風の影響でレスキュー艇である漁船が仲々出せず、予定より30分遅れて1時30分第1ヒートスタート。インズアウトはエントリー順に3つのヒートに分けられ、上位5名計15名が決勝ヒートに進出する。スタートはル・マン方式で行なわれた。沖合では、特に江ノ島側のマーク付近では想像以上に風が強かったようだ。オープン・レースらしく27枚のカラフルなセイルがスタートしていったが、沖のマーク付近までいくとその数がぐっと減

った。満足にマーク廻航が出来ず各選手流され始めている。その中で白と赤のニールプライド6・4のセイル、アルファ・ロケットに乗った金沢の赤土選手がトップで海岸にあるフィニッシュ・ゲートにくぐった。2位には関西から来た佐野選手が、3位に石塚選手が入ったが、その他の選手はタイム・アウト、あるいはレスキューされてドン・フィニッシュ。完走者は僅か3名という厳しいレースとなった。赤土選手に聞いたところ、沖のマーク付近では15%は吹いていたとのこと、3位の石塚選手もゴールした後、その場で吐いてしまったほど苛酷な風だった。

第2ヒートは前ヒートのレスキューに手間取り、スタートが大幅に遅れ3時10分にスタート。風が落ち5%ぐらい、向きも変わったためマークの間隔も狭まり第1ヒートよりも海岸と平行になった。またシヨア・ブレイクだけ大きくなり、スタートがル・マン式なのでブレイクに巻かれ苦労している選手も随分いた。その中でキングコブラを操るバムルーンは好スタートを切り、一周目はダントツで廻航、しかし2周目に入り、同じキングコブラに乗る金沢NSSの児玉選手が追い上げ、3周目のアウトではオーバーラップするまでに差を詰めたが、インでまた少し離され、結局バムルーンがトップ・フィニッシュ。児玉が2着、3位には慶心の磯選手が入った。

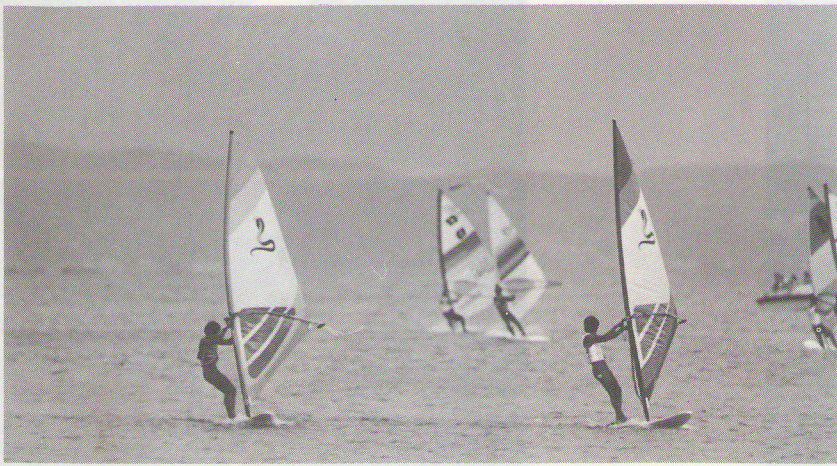
3時55分、第3ヒートスタート。風は相変わらず5%前後、アルファ・チームの小池、根本、池田、西村各選手が好スタートを切った。これに関西から参加したデューフォー・ケン・ウイナー操る矢田選手が加わって5人の争いとなった。しばらくすると矢田がトップに立ち、アルファチームの4名が盛んにチャージをかけるが及ばず、そのまま矢田がトップ・フィニッシュ。そしてアルファチームの4名が続いた。



インズアウト決勝のスタート風景。デューフォー・ケンウイナ、マグナム・プラス、キングコブラ、ニュー・スターボーンなどオープンクラスならではの数々のボードが見られる。

KI

その結果、決勝ヒート出場者は赤土、佐野、石塚、バムルーン、児玉、磯、杉山、田島、矢田、池田、根本、小池、西村の13名となった。もう1人の招待選手であるリサは第2ヒートに出場したが9位だったため決勝進出は果たせなかった。さて、いよいよ決勝ヒート。風は相変わらず5%ぐらい、沖では7%はあるだろうか？ 4時30分スタート、まずバムルーンが飛び出し、マグナム・プラスに乘る磯が続いた。バムルーンは風下寄りのコースを、磯は風上寄りのコースを取った。インズアウトのコースは普通風に対して直角なのだが、この時は少し風が振れ、上りの方が有利だったようだ。磯がトップでアウトマークを廻航、バムルーンとアルファ・ファントムに乘る根本が



KI

インズアウト第2ヒートではバムルーンとNSSの児玉によるキングコブラ同士の争いとなった。

インズアウトで優勝した慶応の磯。彼とバムルーン、根本による3つ巴の決勝はこの日のハイライトだった。



KI

最も風が強くフィニッシュした数が3艇と厳しいレースだった第1ヒートで1位のNSSの赤土選手。



KI

続いた。2周目に入ると磯とバムルーンのマッチレースになり、根本は少し遅れた。バムルーンは常にパンピングをして艇速をかせぎ、コース取りは相変わらず下という方法を取っていた。磯はマークに乗って上るといふ方法を取っていた。磯はマークとマークの最短コースを走っていた。マーク廻航はバムルーンがトップ。最終周に入ると根本がトップに踊り出て、バムルーンとデッドヒートを繰り広げる。しかしゴール目前で根本が沈、バムルーンはこれをかわしきれずクラッシュ。沈はしなかったが大きくロスをした。この間隙をついて磯が両者を抜いてトップ・フィニッシュ。漁夫の利を得た。2位はバムルーン、3位は根本だった。風は弱かったが決勝にふさわしい熱戦だった。



セイルのカラーは、ライト、ヘビー、レディースのそれぞれによって色分けされていた



この大会一番の微風になった第5レース。細かな風の振れと船速を保つことが大切になる



ALL JAPAN MISTRAL CLASS CHAMPIONSHIP

at KAMAKURA, Kanagawa PREF. Sep. 22nd-24th

最終レース前地選手(右)を抜いてフィニッシュする宮城選手(左)は2位を確保

予想通り、菱倉、前地、宮城が常に上位争い。

大会2日目、23日は北風が5〜8%と、絶好のコンディションで始まった。マークが前日の湾内から湾外へ移動されたため、風の振れも前日ほど大きくはなかった。

第3レースの第1風上マークは、逗子マリナー沖に設置された。そのマーク付近で、トップ争いをしていた菱倉選手と宮城選手が、スターボード、ポートで接触。宮城選手がトップに立った。720度解消をしている菱倉選手を抜いた前地選手が2位で回航。菱倉選手は、この時の心境をこう語った。
「一胆は気落ちしたが、その後すぐに気を取りなおし、ベストコースを読むことに集中した」。

この気持ちだが、彼に良い結果をもたらすことになった。正確な風の読みと素早いタックを繰り返すことで、彼は前を走る2人を抜き、トップに立った。そして、そのままフィニッシュ。2位には宮城選手をかわした前地選手が入り、宮城選手は結局3位となった。

続く第4レースは風が落ち、0〜6%。今大会の中で最も微風のレースとなった。このレースでは、スタートラインが極端に風上有利だったため、風上がダンゴ状態となつてしまい、リコール艇が何艇かいた。その中で、風上から絶好のスタートを切ったのが菱倉選手。しかし、神奈川大学の高村伸司選手が、右海面のプロローと風の振れを良く読み、第1上マークをトップで回航。その後を的野選手と菱倉選手が追いかけた。しかし、2本目の上りで、高村選手が的野選手らを引っぱる。ことになり、そのすきをつけて菱倉選手がトップに立ち、フィニッシュ。2位の的野、3位に高村選手の順で次々にフィニッシュしたが、的野選手はリコールのため失格となつてしまった。

第5レースも第4レースとほとんど変わらない展開となり、菱倉選手がトップフィニッシュ。この日までの結果で、菱倉選手が0ポイントと優勝に王

今大会の結果は、ライトクラス・総合優勝ともに菱倉選手。ヘビークラスは赤土選手、レディスクラスは黒岩選手がそれぞれ優勝した。

この大会は、他のデイビジョン1のWサーファークラス、Wグライダークラスに次いで全日本選手権になる。これで、現在日本には「全日本」と呼ばれる大会が3つも存在することになったワケなのだ。

最近、実力者と言われる選手のほとんどがプロになり、この種のレースがいささか華やかさに欠けている傾向にあるが、それでもトライアングルレースは、まだまだ根強い人気を持っている。4年後のソウルオリンピックに向けてのジュニアの育成や、日本のコンディションで楽しめるWSFとしてレガッタが最適であることなどを考えると、このコースレーシング熱は当分、醒めそうにはないはずだ。すべてのWサーファーに平等に与えられる権利として、ウインドサーファー、ウインドグラライダー、ミストラル3つの全日本選手権の今後の発展を願いたい。

トライアングルレースは、根強い人気を持っている。

総合

順位	氏名	1R	2R	3R	4R	5R	6R	7R	トータル
1	菱倉 修	1	1	1	1	1	1	(1)	0
2	宮城 久一	2	2	3	(DSQ)	2	4	2	25.7
3	前地 達郎	4	(5)	2	3	3	2	3	31.1
4	的野 昌彦	3	3	7	(DSQ)	4	6	7	57.1
5	松本 茂	5	4	5	(DSQ)	10	10	4	68
6	高村 伸司	16	13	(DSQ)	2	7	5	5	77
7	小杉 正光	9	11	4	4	8	11	(19)	79
8	鈴木 裕計	6	8	6	9	6	9	(10)	79.1
9	広実 勉	18	(18)	8	5	5	15	6	90.7
10	ユングニッケル・ケン	(20)	6	14	12	17	3	8	92.4
11	宍倉 雄二	7	(DSQ)	10	14	11	7	11	96
12	赤土 正剛	11	7	11	10	(13)	8	13	96
13	竹之内政己	10	9	13	7	19	12	(RET)	106
14	杉山 光治	15	19	(21)	6	9	14	9	107.1
15	真壁 規克	8	14	12	13	12	(16)	15	110



総合の上位6名。後列左からの野、松本、高村、前列左から宮城、菱倉、前地の各選手。最近、鋭い走りでの優勝を続けている菱倉選手は元オリンピック強化選手の2人を押さえての優勝だった。



ライトクラス上位の宮城、菱倉、前地の3選手。ライトクラスの選手の活躍はすばらしく、総合順位でも11位までを占めるという結果だった。

ライトクラス

順位	氏名	1R	2R	3R	4R	5R	6R	7R	トータル
1	菱倉 修	1	1	1	1	1	1	(1)	0
2	宮城 久一	2	2	3	(DSQ)	2	4	2	25.7
3	前地 達郎	4	(5)	2	3	3	2	3	31.1
4	的野 昌彦	3	3	7	(DSQ)	4	6	7	57.1
5	松本 茂	5	4	5	(DSQ)	10	10	4	68
6	高村 伸司	16	13	(DSQ)	2	7	5	5	77
7	小杉 正光	9	11	4	4	8	11	(19)	79

ヘビークラス

順位	氏名	1R	2R	3R	4R	5R	6R	7R	トータル
1	赤土 正剛	11	7	11	10	(13)	8	13	96
2	小林 宏亘	13	12	9	(DSQ)	15	20	14	119
3	佐々木啓三	19	17	16	17	20	(DNS)	17	142
4	矢沢 豊	12	21	23	(DSQ)	23	(DSQ)	27	161
5	横田 勉	(DSQ)	23	24	(DSQ)	21	(DNS)	25	184
6	皆川 治三	25	25	25	(DSQ)	26	24	27	186
7	霜崎 直樹	(RET)	27	(DNF)	(RET)	(DNS)	26	24	192

レディスクラス

順位	氏名	1R	2R	3R	4R	5R	6R	7R	トータル
1	黒岩 久子	26	(DNF)	(RET)	(DNS)	(DNS)	23	28	192
2	大山 奈緒美	(DNF)	(DNF)	(DNF)	(DNF)	(DNF)	25	26	196
3	土蔵 珠実	(RET)	(RET)	(RET)	(DNS)	(DNS)	27	(RET)	202



ヘビークラス上位は、左から小林、赤土、佐々木選手。このクラスは7名とライトクラスに比べて少ないエントリーだった。中強風までの走りがこのクラスの課題



レディスクラスの3名。左から大山、黒岩、土蔵選手。今大会はレディスのエントリーが少なく、華やかさに欠けてしまったが、レディスの発展のためにも多くの選手に参加してほしい。



手をかけた。そして2位に前地選手がつけていた。宮城選手はこのレース失格で、もう1レースも落とせない状況になっていた。

最終日、24日には残り2レース、第6、第7レースが行われた。

第6レース、北風3〜6%。スターラインは前日のリコールを恐れて、かなりへこんでいた。その中を悠々とスタートし、トップになったのが菱倉選手。彼は絶妙の走りですべてトップフィニッシュし、優勝を決めた。

第7レースは、総合2位争いの宮城、前地選手の戦いがみどころとなった。フィニッシュ直前に右に突っ込んだ宮城選手が前地選手をかわし2位でフィニッシュし、総合2位の座を死守した。

福井

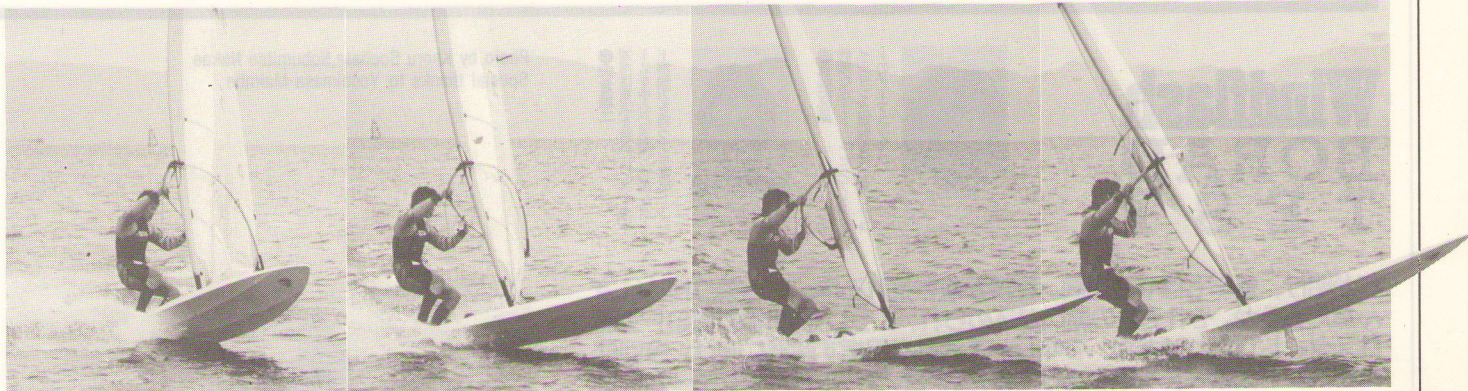
県内初のプロ

ボードセーラーで
三國町の赤土さん

福井県内ではじめてのプロのボードセーラーが誕生した。坂井郡三國町宿で、ボードセーリングの店を営んでいる赤土剛さん(三〇)写真。十歳の時からヨットと親しみ、十六歳の時ボードセーリングに転向した。全日本ウインドサーファークラスに連

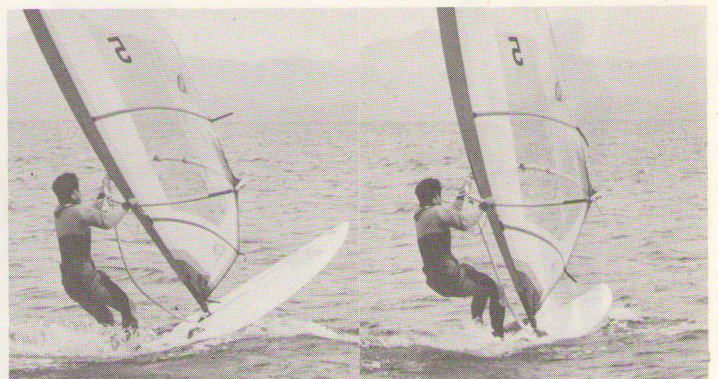


続五回出場。昨年九月の神奈川県鎌倉市であった第一回全日本ミストラルクラスに優勝し、初代チャンピオンの栄冠をつかんでいる。プロに転向した理由は「アマチュアの大会は、メーカーの意向によって統一規格になっているが、プロの大会では、自分の身長や体重、それに技量を合わせたボードやセイルを使うことができるので実力のすべてを発揮できる。もちろん賞金ももらいたいし、自分の名前を全国に広めたいから」。



ジャイブは恐る恐る回すより、思いきり踏んで、体重をかけるように。テイルの厚みや全体的な幅がないだけに反応は良く、グッと踏み込んでもボードはついてきてくれる。ボトムトリプルコンケイブを効率良く使えば、回し込みは380cmの長さを感じさせないだろう。しかしなんといってもこのボードの走りの良さは、スピード性能。セイルの性能もあいまって吹いた時ほど楽しめる

理想的なジャイブ方法



エキスパート設定になっただけで、決してビギナーが乗れないというボードではない。が、このボードを楽しむには、強風が吹いた時の方がベストなのである。

ジャイブは操作性の良さから、回し込みやすい。幅や厚みがありついていないので、反応が良く、思いきり踏み込めばその分、ボードはついてくるはずだ。

エキスパート設定になっただけで、決してビギナーが乗れないというボードではない。が、このボードを楽しむには、強風が吹いた時の方がベストなのである。

ハードなコンディションを設定したエキスパートライダーのためのコースレースボード、それがこのライトニングレースのボードコンセプトである。F₂ワールドカップチームのレプリカモデルというところからも本格的なレースボードであるということがうかがえるはずだ。まずは、その走りの特性からふれていこう。

まず前モデルと比べると、すべての面で、操作性が向上している。これは約1kg軽くなったボードの重量と、おお幅なセイルの軽量化、また、それを含むリグ部とのバランスのよさによるものだ。トップスピードに違いはないが、この軽量化がプレイングまでの加速性や走りだしを良くし、ブローがきれた時の減速の度合を最小限に抑えている。パンピング時にボードを持ち上げるにも、軽い分、足に負担がかからないのも嬉しい。乗りやすさからつながるボードの速さ、スピード性がボードの最も優れている点であり、ハイアスペクトレシオのセイルの扱いに慣れれば、ガンガン走そのスピード感を十分に体感できるだろう。

レイルは立ちあがったボクシートイブ。しかしミッド部のポリウレタンがあまりなく、クローズの時に波に打たれやすいので、エッジをかませ波の面にあわせてスピードで上りたい。またあまりヒールさせすぎるとスピードが鈍るので、できるだけレイル寄りにつけて、ボードを押さえるように心掛けたい。

F₂ LIGHTNING RACE

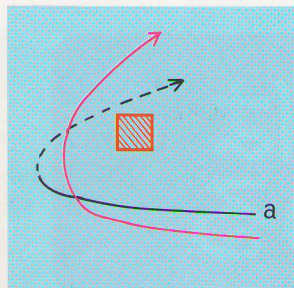
B-1パターン 競って競って直前で シバージャイブで凌ぐ

→相良/a: 斉藤収秀プロ, b: 大館弘プロ
風がかなり強く、斉藤選手は5.5mでオーバーセイル。そのため①大館選手のインをつけずにアウトに出てしまった斉藤選手は、②～⑤までの長い間シバーリングの状態を持ちこたえねばならなくなった。⑤大館選手がセイルを返し、セイルを引き込んで走り出し、やっと斉藤選手はボードを回し始めた。衝突を避けるため、斉藤選手のようにシバー状態で相手が行くまで待たなくては行けないケースも多い。

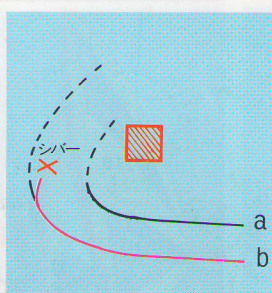


障害を避けるために ピボットターンを体得

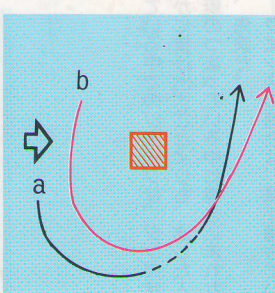
相良/a: 赤土正剛プロ
目前に障害物があったり、ターン半径を小さく急激にボードを回し込みたい時には、後ろ足に重心をかけてテイルを踏み込みピボットのジャイブで回避しよう。②前足でボードの回転をリードし、セイルを引き込むと同時にコシのひねりを活かせる。テイル寄りのレイルを使って回転させるのだ。③ボードが3分の1から半分ほど回転したら、今度はテイルを風下にスライドさせてやるようにする。ボードスピードとボードの回転のタイミングを見計らい素早く重心をテイルから中央に移す。ボードをフラットに保ち、クリューファーストで進路を修正したのちにセイル手を離してセイルを返してやる。



レース時では、レイルターンをするとターン半径が大きくなり危険がある。スピードを完全に殺さない程度の、弧の小さなピボットのジャイブは、マーキングテクニックとして是非覚えておきたい。障害物を避けるのみじゃなく、先行艇のインをつくタクティクスにもつながる



同じ先行艇が回航するのを待つでも、右の斉藤選手がほぼ止まった状態をキープしているのに比べ、セイルを返す前のクリューファーストで回転を調節しながら待つ牧野選手とは少し違う。b 斉藤選手の場合セイルに風を入れたと同時に下ってしまう危険が大きい。a 牧野選手の場合上を取る可能性は大である



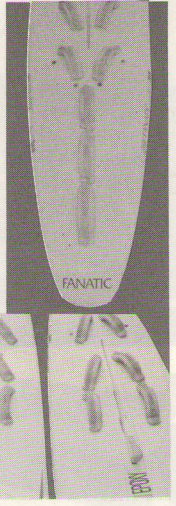
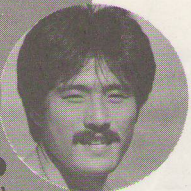
bが大館選手、aが斉藤選手のマーキングラインだ。2人はマーク直前まで、どちらが先にマークにアプローチするか競っていたため、ほぼ同時にジャイブに入った。しかし斉藤選手の方がアウトに出てしまったため、セイルをシバーさせ止まった状態で大館選手が回航するのを待たなければならぬ



上からノーマル、チューニングダガー、ノーマルよりかなり細め

ファナティック キヤット

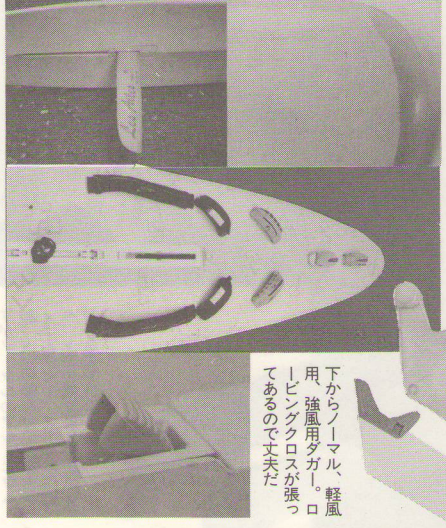
● 小木曾稔(ファナティック)



小木曾選手はレーシングダガーを使用しているが、今年のキヤットではダガーボックスが小さすぎるために、昨年度のエボキシモデルを、今年モデルのデザインにして乗っている。ダガーの材質はノーマルがポリウレタン、三浦選手等が使用のチューニングがウレタンにクロス、レーシングはウッドにカーボン。ガスケットは従来のゴムを取り外して生ゴムを使用。フルダガーでも水の浸入を防いでいる。またダガーの収納をよくするために、タイヤのつや出しを用いている。

写真中、左が'86モデル、右が小木曾選手使用の'85モデル。左に収納されているのはチューニングダガー、右はレーシングダガーだ。ダガーボックスの長さに注目

ロングストラップを使って、足の可動範囲を広げるようにしている。ペダルは閉じた状態になってしまわないように、ピスをずらして打ってある



F2 ライトニング ● 赤土正剛(レゼール)



赤土選手は身長185cm、体重80kgと大柄なため強風用と軽風用、それぞれのダガーを作っている。強風用は敷居に使われる素材、ラワンを用い、硬くはがれにくい。軽風用は米国ひのきを用い軽めにしてある。またダガーヘッドにつけられたテニスボールは、中に型くずれしない芯を入れ、操作を楽しんでいる。クローズ用のストラップは、風の強弱によってスムーズに足を動かせるようにロングストラップを使用。ボトムとエッジは#320、#400、#600を使って丁寧に研ぎ、上り性能を高めるようにしている。

下からノーマル、軽風用、強風用ダガー。ロービングクロスが張ってあるので丈夫だ

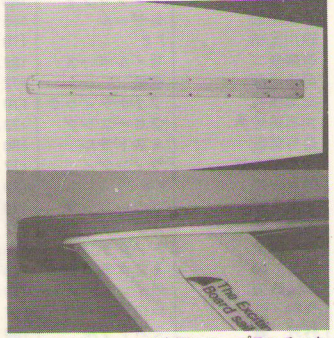
今回優勝した小杉選手使用と同モデル、同チューニングが施されている金光選手使用のトリノ373。上りの良さでは定評がある。ダガーは材質にベイ松を用い、荒れた海面でもアクシデントの起こりにくいロービングクロスで補強されている。ガスケットはアルミサッシの芯材を切って用いた自作で硬くて丈夫。さらに内側にプラスチックを芯材にしてサンドウィッチしたダクロンが張られているために硬く、巻き込みも少なく、収納もスムーズ。ストラップは水を吸いにくい素材に換え、位置はオーダー時に指定。



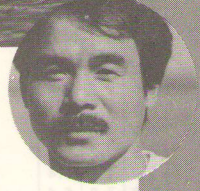
トリノ 373 ● 金光秀吉(トノクラフト)



リーディングエッジはほぼ一直線だ



アルミのガスケットの内側には、プラスチックをくるんだダクロンが張られている。薄いか硬いために、ゴムのようにダガー収納時に巻きこまれる心配が少ない



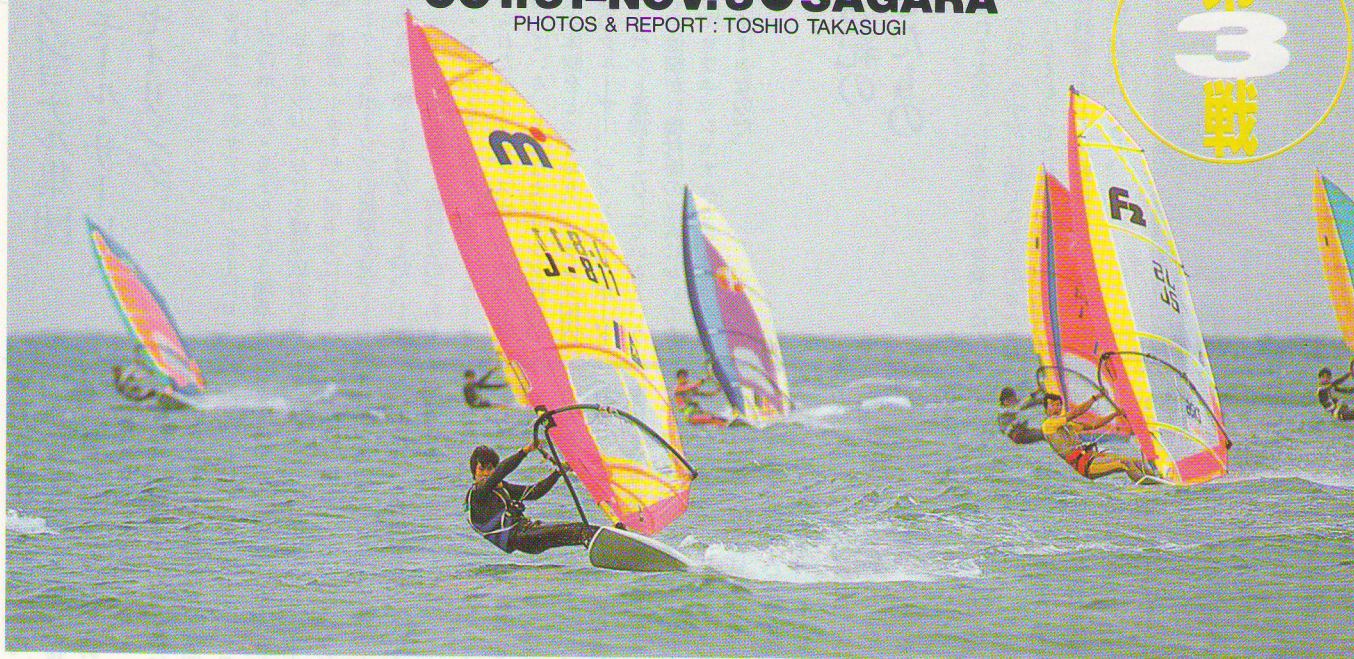
4th CATHAY SWIRE OPEN
at Futamigaura, Ise Mie PREF. 9th-12th Oct.

Sometime Funboard Circuit '86

OCT. 31-NOV. 3 ● SAGARA

PHOTOS & REPORT : TOSHIO TAKASUGI

第3戦

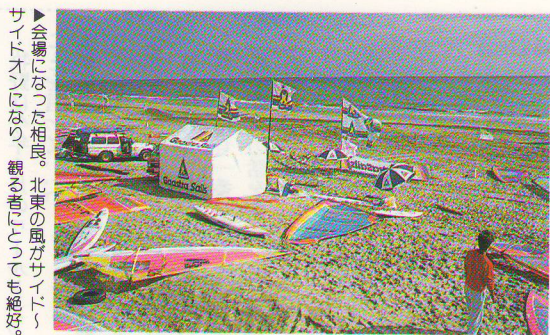


スラローム1位、コースレース2位 もはや、勝率100%の本命・村井

北東の風が吹き抜けると、相良も本格的なファンボード・シーズンになる。このシーズン到来を狙って、サムタイムウアンボードサーキット「第3戦」が行われた。今大会では、遂にスラロームを実施。荒海で鍛え上げてきたスピード狂のコンペティターたちが、この時とはかりに艇速を競い合い、コースレーシングのみの第1、2戦とはまた違ったポイント争いが展開された。ファンティックチームのプロモーションのために来日したマウイ・メイヤーも参加、ハイレベルな第3戦を、コースレーシング、スラローム共に抜群のスピードを見せたのは、村井敦である。

待ちに待ったスラローム。2度のファイナルゲームのトップをいく村井が他を圧倒。

各選手ともに心待ちにしていたスラロームがヒートを繰り返して、ファイナルは最終日に行われた。前日、1日だけ



▶会場になった相良。北東の風がサイド・サイドオンになり、観る者にとっても絶好。

けの秋晴れに、ついに風も上がらず、最後のヒートを残したまま不成立になるかと案じられたが、この日、午前中は、今までのどのヒートよりもむしろ安定した北東風が相良を左から横切った。

初日、ほんの45分間位しか風に恵まれず、予選5ヒートを消化し、翌11月1日には雨にまで見舞われ、風は平均15ノットとはいえ、決して絶好のコンディションというわけではなかった。このコンディションにあつて、予選ヒートを勝ち上がったのは、大館弘、小杉正光、大石美佐男、新嶋光晴、村井敦、金光秀吉、柴崎政宏、関口一成。そして、今大会、ファンティックのプロモーションで来日し、招待選手として参加したマウイ・メイヤーの9人である。スラロームを心待ちにしていた顔ぶれが順当にファイナルに残ったと言えるだろう。ややガステイで、パワフルな選手たちには物足りないとも思えるコンディションに、強引に大きなセイルを操って勝ち上がった。中でも村井は、微風の予選ヒートとやや安定した決勝ヒートでは使用艇を換えている。

コースはダウンスラローム。ファイナルに限り、海上スタートの形をとった。走り出しからマウイ・メイヤーがとばす。村井が続き、関口が後を追った。あつという間に全員がフィニッシュ。



▶やや風の弱かったミニ・ファイナルで燃焼しきれなかった小本宮。



▶アマチュア・コンペティターの第一人者、前地。コースレース4位。



▶コースレースでもう一つだったけど、どのレースも上位に食い込む柴崎。



SOMETIME WORLD CUP '87 65knot

サムタイムワールドカップ'87

18p

50ノットオーバーのブロー、選手は大き過ぎるセイルを急遽カットダウンした。だが、うねりを越える度にボトムが風にあおられ、ボードは宙に舞う。生き残ったのはタフなヤツだけだった。



DESIGN WAR 1987

50p

ワールドカップに登場した最先端のボード、そしてセイル・デザインの新潮流に迫る



HI-TECH COLUMN

58p

ワールドカップテクニカルコラム

ワールドカップで見たハイ・テクニックを分析した最新情報。トッププロのテクは深い！

WORLD CUP AT RANDOM

67p

RESULT

71p

1987 MARUI O'NEILL INVITATIONAL

130p

Wave Sailing Division

新島、御前崎と戦い抜いた
シード選手たちは、休む間もなく
マウイに飛んだ。



御前崎W Cup出場選手名鑑

MENS



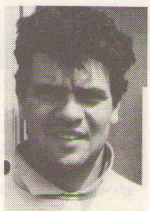
岩橋 厚

ATUSHI IWASHI

①24位◎33位⑤17位⑥
17位②ブリヂストン/ニール
プライド③1958年9
月3日④28歳⑤日本⑥
170cm⑦62kg⑧J-44

アラン・キャデッツ

ALAN CADIZ

①24位◎24位⑤26位⑥
17位②ディガ/ニールプ
ライド③1961年12月20
日④25歳⑤アメリカ⑥
171cm⑦61kg⑧US-16

ピエトロ・パチート

PIETRO PACITTO

①26位◎34位⑤17位⑥
17位②ビック/UPセイル
③1965年8月3日④22
歳⑤イタリア⑥172cm⑦
72kg⑧I-15

アクセル・オム

AXEL OHM

①27位◎45位⑤7位⑥
17位②F2/F2セイル
③1962年12月20日④24
歳⑤ドイツ⑥183cm⑦80
kg⑧G-35

マーク・ウッズ

MARK WOODS

①28位◎22位⑤15位⑥
33位②ティガ/ニールプ
ライド③1965年5月16
日④21歳⑤イギリス⑥
188cm⑦78kg⑧K-12

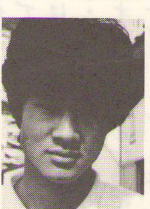
大石 美佐男

MISAO OISHI

①28位◎26位⑤17位⑥
17位②ミストラル/ガス
トラ③1958年10月21日
④29歳⑤日本⑥173cm⑦
73kg⑧J-7

神頭 士郎

SHIRO KANTO

①30位◎35位⑤5位⑥
33位②ノース/ノースセ
イル③1963年8月2日
④23歳⑤日本⑥182cm⑦
82kg⑧J-10

村井 敦

ATSUHI MURAI

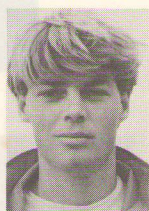
①30位◎31位⑤25位⑥
17位②ミストラル/ガス
トラ③1967年12月14日
④19歳⑤日本⑥180cm⑦
67kg⑧J-811

オノ・テリエ

ONNO TELLIER

①16位◎10位⑤21位⑥
17位②ティガ/ガストラ
③1962年8月21日④24
歳⑤オランダ⑥180cm⑦
77kg⑧H-168スペイン・
ラスムーセン

SVEIN RASMUSSEN

①17位◎9位⑤31位⑥
9位②F2/F2セイル
③1963年5月6日④24
歳⑤ノルウェー⑥178cm
⑦73kg⑧N-1オラフ・バン・
トール

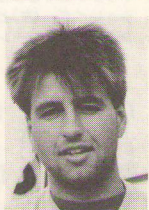
OLAF VAN TOL

①18位◎16位⑤17位⑥
17位②ミストラル/ガス
トラ③1961年5月24日
④25歳⑤オランダ⑥182
cm⑦74kg⑧H-9ベルンハルト・
ブランステッターBERNHARD
BRNDSTAETTER①19位◎25位⑤21位⑥
5位②F2/F2セイル
③1963年3月8日④24
歳⑤オーストリア⑥180cm
⑦70kg⑧OE-1ラルフ・
バックシュター

RALF BACHSCHUSTER

①20位◎19位⑤31位⑥
9位②ミストラル/ガス
トラ③1963年8月2日
④23歳⑤ドイツ⑥184cm
⑦77kg⑧G-55エドウィン・
ボンヴィエ

EDWIN BONVIE

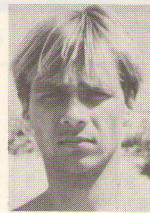
①21位◎39位⑤9位⑥
17位②F2/F2セイル
③1964年1月2日④23
歳⑤オランダ⑥184cm⑦
74kg⑧H-23

トマス・パーソン

TOMAS PERSSON

①21位◎12位⑤36位⑥
17位②ミストラル③1961
年4月1日④26歳⑤スエ
ーデン⑥185cm⑦77kg⑧
S-1ビヨン・
ジュレイダー

BJOERN SCHRADER

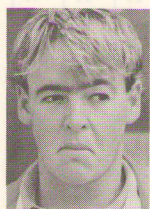
①23位◎21位⑤36位⑥
9位②F2/F2セイル
③1964年12月15日④23
歳⑤ドイツ⑥190cm⑦82
kg⑧G-9

ティム・アーガセン

TIM AAGESEN

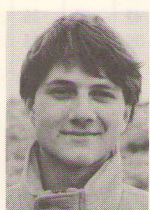
①8位◎8位⑤11位⑥
9位②ミストラル/ニール
プライド③1960年1月
7日④27歳⑤デンマーク
⑥180cm⑦75kg⑧D-1ステファン・バン・
デンベルグSTEPHAN VAN
DEN BERG①8位◎2位⑤17位⑥
9位②ビック/ノースセ
イル③1962年2月20日
④25歳⑤オランダ⑥186
cm⑦72kg⑧H-1アレックス・
アグエラ

ALEX AGUERA

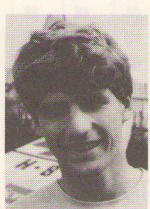
①10位◎14位⑤21位⑥
3位②ティガ/ニールプ
ライド③1961年6月16
日④25歳⑤アメリカ⑥
172cm⑦70kg⑧US-151

ブルース・ワイリー

BRUCE WYLIE

①11位◎5位⑤26位⑥
9位②ミストラル/ガス
トラ③1967年7月4日
④20歳⑤オーストラリア
⑥172cm⑦74kg⑧KA-23ラファエル・
サル

RAPHAEL SALLES

①12位◎18位⑤6位⑥
17位②ティガ/ニールプ
ライド③1963年4月11
日④24歳⑤フランス⑥
174cm⑦63kg⑧F-1エリック・
グローエンウッド

ERIC GROENEWOUD

①13位◎27位⑤12位⑥
5位②ヤマハ/ガストラ
③1968年3月24日④19
歳⑤オランダ⑥184cm⑦
75kg⑧H-8

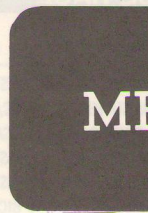
牧野 秀紀

HIDEKI MAKINO

①14位◎13位⑤15位⑥
17位②ミストラル/ガス
トラ③1962年3月11日
④25歳⑤日本⑥180cm⑦
74kg⑧J-22

トム・ルーデック

TOM LUEDECKE

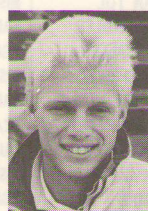
①14位◎7位⑤21位⑥
17位②ティガ/ニールプ
ライド③1961年3月18日
④26歳⑤オーストラリア
⑥180cm⑦26kg⑧KA-1

ロビー・ナッシュ

ROBBY NAISH

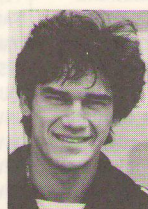
①1位◎1位⑤4位⑥1
位②ミストラル/ガス
トラ③1963年4月23日④
24歳⑤アメリカ⑥178cm
⑦74kg⑧US-1111アンデッシュ・
ブリンダル

ANDERS BRINGDAL

①2位◎3位⑤2位⑥9
位②ティガ/ニールプ
ライド③1967年7月27日
④19歳⑤スウェーデン⑥
193cm⑦75kg⑧S-10

ロベール・テリテオ

ROBERT TERIITEAHU

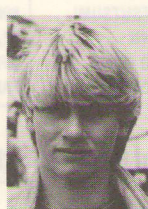
①3位◎11位⑤3位⑥
5位②ファナティック/
ガストラ③1967年11月29
日④20歳⑤フランス⑥
180cm⑦72kg⑧F-35

ネビン・セイアー

NEVIN SAYRE

①4位◎4位⑤14位⑥
5位②ミストラル/ガス
トラ③1960年1月28日
④27歳⑤アメリカ⑥195
cm⑦82kg⑧US-9ビヨン・ダンカー
ベック

BJOERN DUNKERBECK

①5位◎15位⑤7位⑥
2位②F2/F2セイル
③1969年7月16日④17
歳⑤スペイン⑥185cm⑦
75kg⑧E-11

マウイ・メイヤー

MAUI MEYER

①6位◎20位⑤1位⑥
4位②ファナティック/
ART③1966年7月18日
④21歳⑤アメリカ⑥170
cm⑦70kg⑧US-51

フィル・マクゲイン

PHILLIP MCGAIN

①7位◎6位⑤10位⑥
9位②ビック/ガストラ
③1963年2月19日④24
歳⑤オーストラリア⑥190
cm⑦78kg⑧KA-7

Sometime World Cup '87 Document

①総合順位②コースレース③スラローム④ウェイブ⑤スポンサー⑥生年月日⑦年齢⑧国籍
⑨身長⑩体重⑪セイルNO.

LADIES



ジュリー・デ・ワード

JULIE DE WERD

①8位②13位③5位④3位⑤F2/F2セイル③1958年9月23日④28歳⑤アメリカ⑥175cm⑦40kg⑧US-301



マルティナ・ヴァン・ゾーリンゲン

MARTINE VAN SOOLINGEN

①9位②8位③10位④5位⑤ファナティック/ART③1960年12月9日④26歳⑤オランダ⑥178cm⑦70kg⑧H-33



今井雅子

MASAKO IMAI

①10位②9位③8位④10位⑤ガストラ/ミストラル③1967年1月28日④20歳⑤日本⑥160cm⑦52kg⑧J-19



ナタリー・シモン

NATHALE SIMON

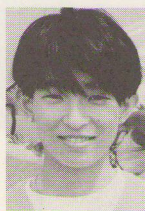
①11位②7位③11位④10位⑤ビッグ/UPセイル③1964年10月25日④22歳⑤フランス⑥175cm⑦57kg⑧F-111



松永みどり

MIDORI MATSUNAGA

①12位③11位④12位⑤10位⑥ニールブライド/アルファ③1962年10月4日④24歳⑤日本⑥165cm⑦52kg⑧J-24



下平真由美

MAYUMI SHIMOHIRA

①13位②12位③12位④10位⑤ファナティック/ART③1965年9月25日④21歳⑤日本⑥163cm⑦52kg⑧J-93



石川紀子

NORIKO ISHIKAWA

①14位②14位③12位④10位⑤ノースセイル/WSF/ワイフ③1964年11月6日④22歳⑤日本⑥160cm⑦45kg⑧J-18



デナ・ドウス

DANA DAWES

①1位②3位③1位④2位⑤ティガ/ニールブライド③1962年2月16日④25歳⑤アメリカ⑥164cm⑦52kg⑧US-71



ナタリー・シーベル

NATALIE SIBEL

①2位②2位③6位④1位⑤ミストラル/ガストラ③1970年3月21日④17歳⑤ドイツ⑥165cm⑦52kg⑧G-11



ナタリー・ル・リエブル

NATHALE LE LIEVRE

①3位②1位③9位④4位⑤ミルトラル/ノースセイル③1964年4月16日④20歳⑤フランス⑥163cm⑦52kg⑧F-12



アンジェラ・コクラン

ANGELA COCHRAN

①4位②5位③4位④5位⑤ホットセイルマウズセイル③1964年3月28日④22歳⑤アメリカ⑥170cm⑦56kg⑧US-21



アニック・グラベルン

ANICK GRAVELINE

①5位②4位③7位④5位⑤F2/F2セイル③1965年7月8日④22歳⑤カナダ⑥171cm⑦66kg⑧KC-1



バレリー・サルー

VALERIE SALLES

①6位②6位③3位④8位⑤ティガ/ガストラ③1965年2月3日④22歳⑤フランス⑥170cm⑦53kg⑧F-32



ケルビー・アノ

KELBY ANNO

①7位②10位③2位④8位⑤ニールブライド/フロムA③1962年10月1日④25歳⑤アメリカ⑥173cm⑦53kg⑧US-22



子安良晴

YOSHIHARU KOYASU

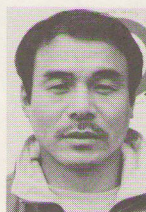
①40位②43位③36位④17位⑤ノースセイル③1963年3月1日④24歳⑤日本⑥173cm⑦62kg⑧J-110



小杉正光

MASAMITSU KOSUGI

①32位②32位③33位④33位⑤トノクラフト/ガストラ③1958年1月4日④29歳⑤日本⑥178cm⑦69kg⑧J-60



金光秀吉

HIDEYOSHI KANEMITSU

①42位②36位③36位④33位⑤トノクラフト/ニールブライド③1951年5月1日④35歳⑤日本⑥166cm⑦62kg⑧J-3



大館弘

HIROSHI OHDATE

①43位②37位③36位④33位⑤ハイフライ/ガストラ③1963年1月28日④24歳⑤日本⑥168cm⑦57kg⑧J-117



柴崎政宏

MASAHIRO SHIBAZAKI

①44位②41位③36位④33位⑤ヤマノ/ガストラ③1960年3月5日④27歳⑤日本⑥170cm⑦27kg⑧J-777



赤土正剛

SEIGO AKADO

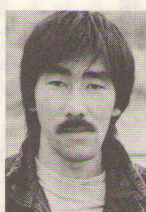
①45位②42位③36位④33位⑤F2/F2セイル③1959年2月9日④28歳⑤日本⑥186cm⑦83kg⑧J-5



堤修三

SYUZO TSUTSUMI

①46位②44位③36位④33位⑤ノース/ノースセイル③1956年12月18日④30歳⑤日本⑥178cm⑦77kg⑧J-2



緒形安彦

YASUHIKO OGATA

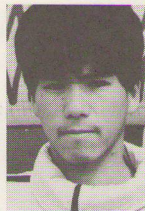
①47位②46位③36位④33位⑤ハイフライ③1958年2月25日④29歳⑤日本⑥173cm⑦57kg⑧J-1611



パトリス・ベルベオック

PATRICE BELBEOCH

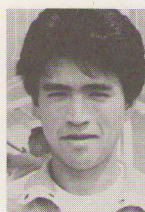
①32位②23位③26位④33位⑤ミストラル/ガストラ③1966年5月12日④21歳⑤フランス⑥194cm⑦87kg⑧F-81



関口一成

KAZUSHIGE SEKIGUCHI

①33位②40位③13位④33位⑤F2/ガストラ③1962年7月29日④24歳⑤日本⑥180cm⑦67kg⑧J-44



三浦照行

TERUYUKI MIURA

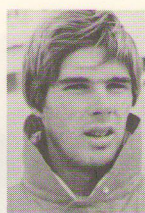
①33位②38位③31位④17位⑤ファナティック/ART③1962年4月6日④24歳⑤日本⑥169cm⑦59kg⑧J-71



モンティ・スピンドラー

MONTY SPINDLER

①33位②17位③36位④33位⑤ファナティック/ART③1954年7月28日④30歳⑤アメリカ⑥188cm⑦80kg⑧US-17



トーベン・コーナム

TORBEN KORNUM

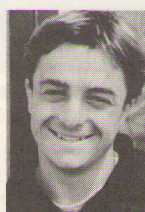
①36位②29位③26位④33位⑤ミストラル/ニールブライド③1962年1月19日④25歳⑤デンマーク⑥175cm⑦78kg⑧D-2



星野哲哉

TETSUYA HOSHINO

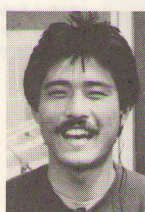
①37位②30位③31位④33位⑤ミストラル/ガストラ③1960年2月15日④27歳⑤日本⑥180cm⑦72kg⑧J-111



チェザーレ・カンタガリ

CESARE CANTAGALLI

①38位②47位③31位④17位⑤ファナティック/ART③1968年12月14日④18歳⑤イタリア⑥165cm⑦55kg⑧I-99



小木曾稔

MINORU OGISO

①38位②26位③36位④33位⑤ファナティック/ART③1949年10月1日④27歳⑤日本⑥181cm⑦73kg⑧J-55

61
COMPETITOR

World Cup 2002
 Document



PART 4

今年もまた数多くの名勝負が生まれたワールドカップ in 御前崎。
 しかし戦いが輝かければ、輝かしいほど、その裏には幾つものドラマが
 潜んでいる。ライダー達の勝利を願い、影でそれを支えるサポートスタ
 ッフ。ここではそんな彼らの活躍を御紹介しよう。

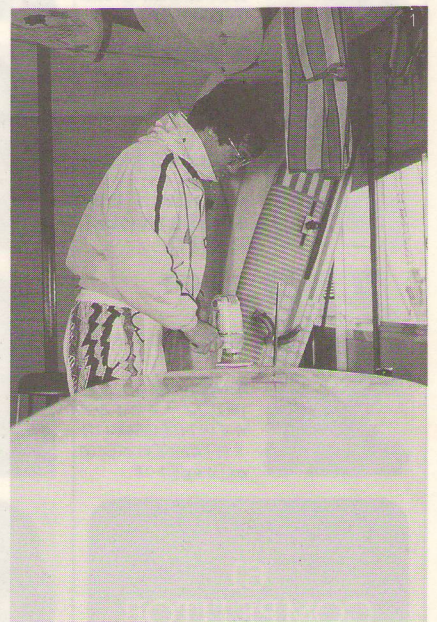


- ① ボードの修理もその日のうちに、完璧に仕上げられる
- ② 防寒対策にもなったこのウェア。来年は市販の予定があるという
- ③ 最高の状態でレースを行なうためにライダーもスタッフもその目は常に真剣である

勝負に専念できずに違いはない。

揃いのウェアにランシーバーで、ビーチとブースの連絡は万全。 F2

ビヨン・ダンカーベック、ジュリア・デ・ワードら総勢10名のライダーを抱えていたF2チーム。ひと目でそれとわかるようにお揃いの टीमウェアを着ていた彼らは、さらに浜とブースの連絡を密にするために、各自がランシーバーを持つといった徹底ぶり。これは、例えばビーチで部品トラブルが起こった時にも、すぐ対応できるようにという役立ちモノ。国内スタッフは3人が



常勤。彼らは忙しそうに浜で動き回っていた。海外スタッフも、本国オーストラリアからチームマネージャーとシェイパー、さらにカメラマンが来日。ボードに故障が発生すれば、シェイパーがすぐにその修復にとりかかっていた。

今年のサポート体制は、万全だったといって良いだろう。しかし、過去には苦勞もあった。例えば民宿の入浴。まったく知らない人と入浴を共にすることや、朝方シャワーを浴びるのを習慣にする外人選手に対応するために、民宿にも特別のお願いしなければならなかったという。これも今年クリア。ライダー達も

**THE 3rd MARUI/O'NEILL WORLD TOUR
SLALOM INVITATIONAL MIURA
9-14 MAY, 1989/MIURA BEACH, KANAGAWA**

疾風怒濤のスラローム・バトル



PHOTO: T.TAKIGUCHI

第3回丸井オニールワールドツアー第2戦——三浦大会

今回勝つ自信があったヒヨコ、アンタース、ロヘールの不在でフィルは優勝候補の筆頭に上げられていたが、第1イリミネーションから、ファイナルを前に敗退し、ヒートは大混戦となった。丸井オニールワールドツアーの中でもスラローム1種目だけの勝負となるこの大会は、昨年までの開催地、新島から、神奈川県三浦海岸へと移動。普段は都市近郊セイラーがスラロームゲレンデとして親しんでいるビーチを舞台に、世界、そして日本のトップセイラー48名をインビテーションして、スリリングなテッドヒートが展開された。





1位 Phil McGain:KA-7

最後の最後に優勝をさらい「勝つことは自分の励みになる最も大切なことサ」と言い切ったフィル。初日はあまり調子が良くなって17位というヒートもあったが、最終日復活は見事



2位 Holmberg Matthias:S-17

全くのノーマークの選手だったスウェーデンのマティアス選手。初日第1レースから2位に食い込んで、そつなくまとめて結果2位。ボードはティガ、セイルはニールブライドを使用



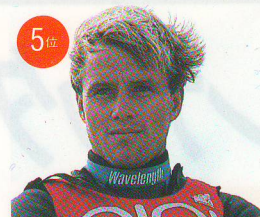
3位 Robby Naish:US-1111

最終レースの最終インマークで沈んで優勝を逃したロビー。自分が悔しくて、自分ばかり追い掛ける撮影ヘリコプターにも怒っていた。でも土曜のロビーは子供の様に無邪気だった



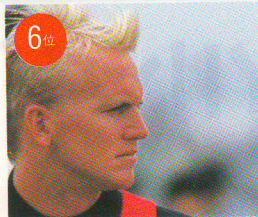
4位 THORKIL KRISTENSEN:D-40

DASH FOR RACEでは3位に入り200ドルを稼ぎ、チームレースでは33ドル、オフィシャルレースで3200ドル、合計3433ドルを手に入れたトーキル。第1レースでの9位をカットしての入賞だ



5位 Svein Rasmussen:N-1

第1レースにトップを取り、続く第2レース6位、ポイント6.7で前半にトップに立ち、最終日までの数日間には優勝に一番近い位置にいたスペイン。最終日のコンバットサバイバルに破れた



6位 Luke Hargreaves:KA-25

バンクっぽいヘアースタイルに、大きな笑い声で異色な雰囲気漂わせるルーク。5-4-5-22.5最終レースカットで6位に入賞。最終日のレースには気合が入っていた

RESULT

	N A M E	SAIL NO	Elim1	Elim2	Elim3	Elim4	TOTAL
1	PHIL MCGAIN	KA-7	17.0	0.7	4.0	0.7	1300
2	MATTHIAS HOLMBERG	S-17	2.0	10.0	3.0	2.0	1183
3	ROBBY NAISH	US-1111	6.0	3.0	0.7	4.0	1079
4	THORKIL KRISTENSEN	D-40	9.0	5.0	2.0	5.0	988
5	SVEIN RASMUSSEN	N-1	0.7	6.0	7.0	12.0	910
6	LUKE HARGREAVES	KA-25	5.0	4.0	5.0	22.5	845
7	BRUCE WYLIE	KA-23	7.0	2.0	30.5	7.0	793
8	DON MANTAGUE	KC-4	3.0	12.0	11.0	3.0	754
9	MARK PEDERSEN	KA-6	8.0	8.0	6.5	9.0	728
10	MANOLO BARLET	F-272	4.0	7.0	30.5	18.5	702
11	OLAF VANTOL	H-9	22.5	18.5	8.0	6.0	676
12	EDWIN BONVIE	H-2	18.5	9.0	10.0	15.0	663
13	NORIO ASANO	J-25	15.0	11.0	30.5	10.0	650
14	MINORU OGISO	J-55	18.5	13.0	9.0	36.5	637
15	DAVID ROSS	KC-19	14.0	14.0	22.5	13.0	624
16	ANDY MORRELL	KV-1	12.0	8.0	30.5	26.5	611
17	PETE CABRINHA	US-111	36.5	16.0	12.0	18.5	598
18	ATSUSHI IWAHASHI	J-44	22.5	15.0	13.0	18.5	585
19	CHRISTIAN HERLES	Z-11	10.0	18.5	18.5	18.5	572
20	PATRICK BOURGONJE	H-93	44.5	22.5	18.5	8.0	559
21	IJIMA NATSUKI	J-414	30.5	36.5	18.0	11.0	546
22	HIDEKI MAKINO	J-22	13.0	18.5	44.5	30.5	533
23	TERUYUKI MIURA	J-71	36.5	18.5	15.0	30.5	520
24	KAZUSIGE SEKIGUCHI	J-47	16.0	26.5	24.5	30.5	507
25	HIROMI SATO	J-9	22.5	26.5	22.5	22.5	494
26	MICHIYO NOZAKI	J-77	18.5	36.5	36.5	16.0	481
27	TSUTOMU SATO	J-20	22.5	22.5	26.5	44.5	468
28	HIROSHI OHDATE	J-1117	30.5	44.5	16.0	26.5	455
29	ERIC GROENWOOD	H-8	11.0	36.5	28.5	44.5	442
30	ALEX SCHWAB	OD-10	26.5	36.5	18.0	30.5	429
31	KAZUO MORIKAWA	J-66	26.5	26.5	36.5	22.5	416
32	KANTO SHIROU	J-10	44.5	26.5	36.5	14.0	403
33	MITSU HARU NIJIMA	J-1111	44.5	30.5	14.0	36.5	390
34	HIDEKAZU MORI	J-88	30.5	44.5	18.5	36.5	377
35	HISAO NAKAZATO	J-45	26.5	22.5	44.5	44.5	364
36	TAKAYOSHI TATENUMA	J-222	26.5	30.5	36.5	44.5	351
37	SHUZO TUTUMI	J-2	36.5	30.5	44.5	26.5	338
38	NORIYUKI SHIROWA	J-922	36.5	36.5	22.5	36.5	325
39	HIDE MI FURUYA	J-67	44.5	30.5	36.5	36.5	312
40	FUMUhide SAITO	J-661	44.5	36.5	44.5	26.5	293
41	MASAMITSU KOSUGI	J-60	36.5	44.5	26.5	44.5	293
42	SEIGO AKADO	J-5	36.5	44.5	36.5	36.5	273
43	YUSHITAKA IKEDA	J-73	44.5	44.5	44.5	22.5	260
44	ATSUSHI TSUCHIYA	J-17	30.5	44.5	44.5	36.5	247
45	TOMOYASU TODA	J-372	44.5	36.5	36.5	44.5	221
46	KAZUO OKADA	J-377	36.5	44.5	44.5	36.5	221
47	OSAMU HISHIKURA	J-1411	44.5	36.5	36.5	44.5	221
48	SACHIO KAMEI	J-700	44.5	44.5	44.5	44.5	195

日本人の
最高成績、
浅野則夫
の航跡

なかなか快調の走りを見せ、13位の成績を収めた浅野則夫選手、20歳。若い彼が見た世界のレベルと自分の位置の感想を聞いた。

Q: レースの感想は?

A: サムタイムの時はメチャメチャ緊張しちゃって。みんな速いし、スタートなんかは本当に緊張して。でもオニールの時はその緊張が取れて、慣れたって言うのか、何人かの外人選手とも知り合いになれて、リラックスしていられた。

Q: サムタイムからオニールへ、自分自身の切替はどのように?

A: サムタイムの時は成績が悪かったし、外人選手には全然ついていけないし——でも次はやってやろうって思っていた。

Q: なにか努力したのかな?

A: なにか特別な事なんかなくたって、リラックスできたのが良かったってことです。知ってる人も一杯増えたと、日本のレースって感じだったでしょう、三浦だし。

Q: 印象に残っているレースは?

A: 第1ヒートは風が弱くて、そ

れにまだ緊張があってスタートが全然わかんなかった。でも2レース目からはだんだん判ってきて、ファイナル出場はもうちょっとだった。またそれで緊張しちゃいましたね。ファイナル進出だ、なんて。でもこのヒートを走った後は、

気持ちもスーっとらくになって、またいいスタートが切れるようになったんです。第3レースはセミファイナルに進出できる順位だったんですけど、失格になっちゃって。マークを回航する時に先行艇が大回りしたんです。で、僕がい

んを突いていったら、先行艇はもうセイルを引き込んで走っている状態。僕はセイルを引き込もうとしている時、止まっている状態ですよね。その大回りした先行艇が、僕のボードの横にドンと当たって来たんです。僕はそれを振り切って走って4位に入ったんです。でも抗議を出されて。

印象に残ったのは、やっぱり第2レース。セミファイナルの最終のインのマークで沈。その沈をするマークの前にトーキル(クリスチャンセン)に抜かれて、マークにアプローチした時に、スケグが抜けちゃったんです。いつもだったら戻ると元に戻るんですけど、戻らないで、戻ったつもりでジャイブしたら滑って沈。自分では途中、これはファイナル行ったな、なんて思っていたから逆にもうその時に緊張が無くなっちゃって。2位で走っていて、トーキルに抜かれて3位。後ろを見たら一寸空いていて、いけるななんて思っていたのに沈をしちゃった。痛かつ

ノリオが残した航跡は今後彼自身に大きく響きそうだろう



たです。行きたかったですネ。

Q: で、次の大会予定は?

A: 海外のレースの予定は、まずゴージ、マウイとニューカレドニアには行きたいですね。

Q: 2つの大会で学んで、次の大会ではと考えていることは?

A: もっと速く走れないと…。スタートは勉強になりました。後ろからタイミングを計ってラインに突っ込んで行くっていう感じが掴みかけたんです。でも第1マークに行くまで、いくらスタートが良かったって抜かれちゃうんです。スピード、痛切に感じます。

県内でただ一人のプロサーフアーの赤土正剛さん(三)三
 国町宿三丁目が、今月初めに韓国・済州島で開かれたウインドサーフインのチェジュシラー・ワールド・カップで、世界の強豪に交じって総合十五位に入る健闘をみせた。途中、マストが折れてレースが続行不可能になるといふアクシデントに見舞われながらも過去最高の成績が残せたことで、赤土さん自身にもワールド・カップ優勝の夢が大きく膨らんで来た。

大会は四日から八日までの五日間、開かれた。今年からワールド・カップの一つに取り入れられた大会で、一斉にスタートしてゴールを目指すコースレースと、ブロック

済州島大会で15位 自分の速さに自信

県内ただひとりのプロサーフアー

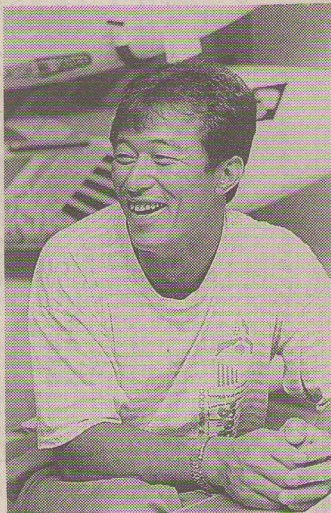
赤土 正剛さん(三)

とにトーナメントを行うスラムの二種目で争われた。三十五人の参加選手はいずれも世界のトップクラス。その中で赤土さんは、コースレ

とにトーナメントを行うスラムの二種目で争われた。三十五人の参加選手はいずれも世界のトップクラス。その中で赤土さんは、コースレ

とにトーナメントを行うスラムの二種目で争われた。三十五人の参加選手はいずれも世界のトップクラス。その中で赤土さんは、コースレ

目指せ!!



ウインドサーフインのワールド・カップ優勝に夢を膨らませる赤土さん

W杯優勝

が、世界とのレベルの差を思い知らされていた。そんな赤土さんがプロ選手として飛躍するきっかけとなったのが、自ら開いているウインドサーフインのワールド・カップで、現在年間三十八戦が行われているが、強力なスポンサーのいない赤土さんにとって全戦に出場するのはとても無理。しかし地元周辺に競争相手がいない赤土さんにとっては「ワールド・カップに出ることがとても素晴らしい」といふ。今回の大会を終えて「自分の速さに自信がついた。近い将来ぜひ一度ワールド・カップの優勝を手にした」と闘志を燃え盛らせていた。

高岡選手(上30歳以下100歳以上)が大会新

北陸マスターズ陸上 年代別に熱戦

第七回北陸マスターズ陸上競技選手権大会(北陸マスターズ陸上競技連盟など主催)は十六日、福井運動公園陸上競技場で開かれた。本県からは男女合わせて約七十人の選手が出場し、年代別に各競技に熱戦を繰り広げた。男子三十歳以上の百メートル選手が11秒4の優勝した。県勢は次の通り。

(火曜日)

昭和59年(1984年)5月15日

- 男子
- 一〇歳以下
- 【三十歳以上】▽百メートル ①高岡 藤誠一▽千五百メートル ①鳥居真二
 - 【三十五歳以上】▽百メートル ①伊藤 茂一▽千五百メートル ①堀江清正
 - 【四十五歳以上】▽百メートル ②音 武田 雄一
- 女子
- 【三十歳以上】▽百メートル ①高岡 藤誠一▽千五百メートル ②三上肇
 - 【三十五歳以上】▽百メートル ①境鉄蔵
 - 【四十五歳以上】▽百メートル ②音 武田 雄一

は次の通り。

ラレ高跳び

①応崎元市

①三上肇

①赤間 藤正信

は次の通り。

ラレ高跳び

①応崎元市

①三上肇

①赤間 藤正信

①八木実

①加藤正信

①河合安子

①八木実

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

①加藤正信

①加藤正信

①河合安子

全福岡70

3733

都2勝1敗

④北陸3敗

北陸高校開

の福井市長杯

ットボール大

日は、県営体

行われ全福岡

陸は3敗で四

京 都102

5646

全福岡78

3642

け美砲丸投げ

④

家須恵子 7歳50m砲丸

18歳94

【五十歳以上】▽砲丸投げ

③

②中林征子

【五十五歳以上】▽砲丸投げ

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

③

①河合安子 5歳38

TOP RANK SPEED
100m ÷ 5'81秒 =
61.962km/h

ガラム天竜100mダッシュ



競争するためのスピードではなく、単に自分のプレーイングスピードは一体どれくらいなんだろう？
3年前にそんな素朴な疑問から生まれた100mダッシュ。

スピードを計測することが想像以上に面白いアソビであることを発見したウインドサーフクラブ編集部は、
新しい興奮の機会を全てのウインドサーファーに与えるべく舞台を天竜川に移しそれを大会へと導いた。
初回の記録は飯島夏樹の出した33.93km/h。それから2年後ガラムのスポンサーを得て規模が拡大されたこの大会は、
F1レーサーのように闘志をむき出しにした選手達がスピードを競うために集う戦場となった。

エキサイトするのは選手だけではない。

観衆もまた、刻々と変わる風速と次々にたたき出されるタイムの変化のみに飽きることなく興奮を感じるのだ。

主催/ガラム天竜100mダッシュ'95実行委員会

特別協賛/日辰貿易株

協賛/ウイングレルスポーツ&レジャー(株)、(株)ウインドサーフィン
ジャパン、(株)シーワークス、C.WORLD Co.,Ltd、JRS、シュリロレ
ーディング Co.,Ltd、タスカー販売(株)、中村船具工業(株)、ヌー
ベルバーグ インターナショナル(株)、(株)マニューバーライン、メイ
ンインターナショナル、(株)モビーディック、(有)レゼール、(株)エ
ヌシーエス、トノクラブト(株)

協力/日本スピードセイリング協会、ハマウイングフリート

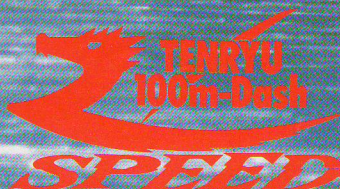
企画プロデュース/(株)広告工房

共催/月刊ウインドサーフクラブ

PHOTO/H. USAMI, T. SATOMURA



GUDANG
GARAM



風には恵まれたもののその風は海面を荒らし、逆にスピードには仇となった。

3月11日 快晴

この日は朝から北西の風オンショア、ブローで10 m/s というスピードにはふさわしい風が吹いていた。しかし対岸の建物の影響でコース上はセイルサイズ6.5 (アンダー〜ジャスト)。午前9時ちょうどにスキッパーズミーティングが行われ、出場選手にはウォームアップランの時間が与えられた。その間の数十分風はさらに上がりブローがコンスタントに入るようになってきた。セイルサイズは6.5でオーバー〜ジャスト、ブランケとなっていたコース上にも風が入るようになった。間もなく風は6.5で完全にオーバーのコンディションとなった。ウォームアップランに出た選手達のボードは舞い上がり、飛ばされて激沈という場面も。コントロールの効かなくなったセイラー達がテトラポットに打ち上げられる姿も見られた。この時すでに風速は8〜11m/s。このコンディションなら、60 km/h も夢ではない。しかし60km/h の記録を出すには100m を6秒で走らなければならないことになる。

この壁を越えることができるだろうか？ 10時55分にコース取り設定最終確認アナウンスが入り間もなくウォームアップラン終了。競技開始直前、西風は13 m/s までに達した。ウェイトングエリア砂洲の向こうに見える海ではダブル以上の波が不気味に割れて豪音を轟かせている。レースエリアの河口でも波長の短い波が立ちしかも意外と高低差の激しいスピードには厳しいコンディションとなってしまった。スタート直前にマイクを握っていた池田プロのコメントによると「ポリウムが少なく、なるべく幅の細い板がよい」とのことだ。

11時15分に競技が開始された。競技方法としては、総勢103名の選手が第1グループから第4グループに振り分けられ、グループ毎に沖にあるウェイトングエリアより出艇し、第1マーク手前のスタートマーシャルで GO サインを出された1名だけが助走へ入り、計測地点を駆け抜けることになる。緊張の第1レースで真っ先に、コースエリアに飛び込んできた

のは、レゼールの赤土正剛であった。記録は41km/h とまずまずである。「水面がかなりチョッピーで強いブローが入ると、かなりきつかった、100m は短すぎる」と走り終えた直後の赤土はコメントしている。

次々と選手が駆け抜ける中、上空に大きな雲が近づき、風がやや落ちぎみになる。天竜川は御前崎のコンディションと同じように上空に雲が近づくと風が落ちるのだ。計測区間の風は6.0でアンダー。風速が落ちるとどうしても対岸のブランケの影響が色濃く露呈してしまう。20余名の選手が出艇したが、赤土の記録を破る選手は現われなかった。

昼過ぎに風は北に振れ、コース設定変更の為、レースが一時中断された。その間ウェイトングエリアでは第2グループの選手がウェイトングを強いられた。立ち込めていた雲が抜け、最大風速は15m/s、ブランケにも8〜9m/s の風が吹いていた。12時45分に間もなくレースが再開されるというアナウンスが入ったが、後になって、ウェイトングエリアにはア

強弱の激しい、風がセイルの選択とチューニングを

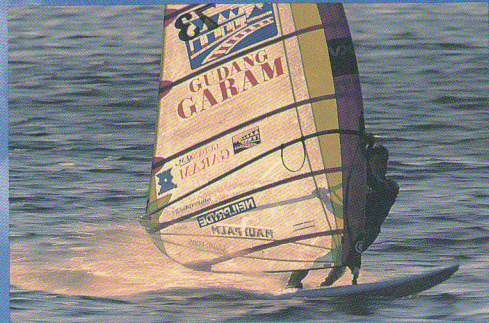


第1レース唯一50km/hの壁を破りトップに立った長屋のフォームは力強く、やや強引ささえ感じられる。この日チョイスした道具はノースセイル5.7 (ジャスト)、ボードはロバーツカスタムだ。1レース目が1位だったことは全く知らなかった。



こうなってしまったらもうリカバリーの余地はない。あとは、ケガのないことを祈るばかりだ。

ミスターガラム、池田良隆プロ。記録はともかく、この人がいなければこの大会は始まらない。



かなり厳しいコンディションとなり出走をあきらめた選手やレディスの中には5.0m以下のセイルを使う選手も見受けられた。

セイルの性能が上がりが久しくソハエタキという現象を見ていなかったような気がするが、さすがに15m/sのブローはきつかったのか！



レディスでは風が強すぎて、1日目のレースをキャンセルする選手もいた。ダウンとアウトを目いっぱい引いたセイルはまるで板のようである。

FIST RUN

Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed
1 5	0:00:08.70	41.379km/h	13 411	0:00:09.03	39.867km/h	25 26	0:00:08.28	43.478km/h	37 61	0:00:08.18	44.010km/h
2 37	0:00:08.70	41.379km/h	14 1	0:00:08.84	40.724km/h	26 876	0:57:30.35	-0.063km/h	38 58	0:00:08.43	42.705km/h
3 29	0:00:10.12	35.573km/h	15 715	0:00:09.23	39.003km/h	27 999	0:00:08.90	40.449km/h	39 7171	0:00:09.98	36.072km/h
4 3155	0:00:12.41	29.009km/h	16 25	0:00:09.89	36.400km/h	28 89	0:00:09.64	37.344km/h	40 114	0:00:08.85	40.678km/h
5 411	0:00:00.00	#DIV/0!	17 5577	0:00:11.62	30.981km/h	29 10	0:00:10.34	34.816km/h	41 43	0:00:10.41	34.582km/h
6 W13	0:00:10.90	35.679km/h	18 15	0:00:09.67	37.229km/h	30 69	0:00:08.00	45.000km/h	42 33	0:00:08.67	41.522km/h
7 91	0:00:10.92	32.967km/h	19 32	0:00:10.11	35.608km/h	31 540	0:00:09.25	38.919km/h	43 38	0:00:07.71	46.693km/h
8 1359	0:00:09.36	38.462km/h	20 12	0:00:11.12	32.374km/h	32 9202	0:00:08.98	40.089km/h	44 154	0:00:08.80	40.909km/h
9 30	0:00:09.52	37.815km/h	21 55	0:00:11.69	30.796km/h	33 8008	0:00:08.02	44.888km/h	45 49-777	0:00:08.18	44.010km/h
10 23	0:00:09.80	36.735km/h	22 385	0:00:11.42	31.524km/h	34 160-113	0:00:09.00	40.000km/h	46 70	0:00:07.71	46.693km/h
11 977	0:00:10.72	33.582km/h	23 814	0:00:11.85	30.380km/h	35 36	0:00:08.81	40.863km/h	47 7221	0:00:08.38	42.959km/h
12 60	0:00:09.01	39.956km/h	24 150	0:00:07.96	45.226km/h	36 876	0:00:08.43	42.705km/h	48 117	0:00:07.20	50.000km/h

ナウンスが届いていなかったことがわかりウェーティングしていた選手の間からは寒さと極度の緊張感の中、なかなか再開されないいらだちで、怒りの声も出ていたようだ。結局1時45分にレースは再開された。再開後に一番に戻ってきた加藤幸夫が45.226km/sの記録をマークしこの時点でトップに立った。彼にコメントをとったところ、「寒くて死にそうだった。アナウンスも何も聞こえなかったのでとりあえず一度戻って来た。コンディションは第1グループよりも良くなり、プランクにも風が入るようになったが、なによりも第2グループはウェーティングが長かったため、寒さと怒りで一丸となり、妙に団結感が生まれ、普段以上にパワーがでたのではないかなと思う」と怒りが生んだトップタイムを語った。

レース再開10分後再び風が上がり、ボードが舞い上がる程の強風になった。今大会のようにある一

定区間の通過タイムを計ることによって、スピードを割り出すという方式のスピードの計測方法では、風向き、コースの設定を考えると、スピードを犠牲にして最短距離を選ぶか、それとも走行距離を無視しておもいきり下らせてスピードをとるか二者択一のタクティクスが問われる。

次にトップに踊り出たのはホットセイル所属の遠藤俊二プロである。記録は46.693km/h。下りきみに走ったことと、ブローをいいタイミングでつかめたことがよかったのではないかなと思われるが、また昨年の早川選手の記録を更新する者が現れない。タイムリミットの15時15分に89名が走り終えたところで第1レースが終了となったが、50km/hの壁に届いたのは長屋清人選手ただ一人であった。長屋選手はホットビートに所属するが、驚くべきことにウインド歴はわずか3年の選手である。



完全なオーバーパワーにマストはひしゃげ、30ノットのブローをもろに受けたパネルは全体にシワを寄せ、悲鳴を上げる。セイラーはわずか30cmのフィンのグリップに全ての神経を集中させる。

煮詰める選手達を最後まで悩ませた。



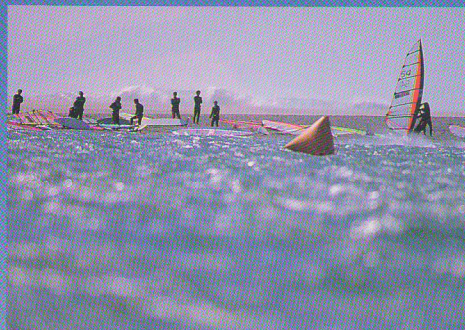
初日のスキッパーズミーティング。強風の中選手達は闘志を燃している。



続々と更新される好記録にギャラリーは目が離せない。



自分の結果が振り出され、ノーティスボードに群がる選手の姿が目立った。



アウトの海ではダブルオーバーの波が割れる。チョッピーな川面との対比がなんとも不気味な光景である。



最近上り調子で、もはや敵なしかと、絶対の自信を持って臨んだ城和であったが...



Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed				
49	288	0:00:07.35	48.980km/h	61	39	0:00:08.78	41.002km/h	73	73	0:00:08.01	44.944km/h	85	1373	0:00:08.28	43.478km/h
50	153	0:00:08.08	44.554km/h	62	34	0:00:09.13	39.430km/h	74	197	0:00:09.83	36.623km/h	86	955	0:00:08.39	42.908km/h
51	14	0:00:08.60	41.860km/h	63	13	0:00:09.60	37.500km/h	75	11	0:00:08.58	41.958km/h	87	31	0:00:09.25	38.919km/h
52	8880	0:00:07.96	45.226km/h	64	20	0:00:08.70	41.379km/h	76	5041	0:00:09.90	36.364km/h	88	3812	0:00:08.52	42.254km/h
53	3131	0:00:08.46	42.553km/h	65	714	0:00:07.63	47.182km/h	77	5566	-0:14:27.20	-0.252km/h	89	999	0:00:08.42	42.755km/h
54	714	0:00:08.53	42.204km/h	66	311	0:00:07.93	45.397km/h	78	504	0:00:10:00	36.000km/h				
55	71	0:00:09.94	36.217km/h	67	2	0:00:50.19	7.173km/h	79	211	0:00:09.28	38.793km/h				
56	46	0:00:11.50	31.304km/h	68	632	0:00:08.27	43.531km/h	80	7	0:00:10.47	34.384km/h				
57	1954	0:00:11.70	30.769km/h	69	54	0:00:08.25	43.636km/h	81	3642	0:00:11.11	32.403km/h				
58	17	0:00:13.02	27.650km/h	70	66	0:00:08.37	43.011km/h	82	781	0:00:09.02	39.911km/h				
59	370	0:00:07.81	46.095km/h	71	3773	0:00:07.82	46.036km/h	83	21	0:00:07.74	46.512km/h				
60	2881	0:00:10.80	33.333km/h	72	4	0:00:08.58	41.958km/h	84	18	0:00:09.49	37.935km/h				



セイルを開いた瞬間、ボードはコンドローイー、セイラーを含めると総重量100kgものボードがまるで氷の切れた風のように5m以上に飛ばされた。



大会会場となった天竜川の全景、地元の皆様の始め御協力頂いた皆様！心より感謝いたします。

こすぎ、なお、あゆみ、りな(又)、ちずこあき
 高速道路で80分のジキさんが逆走してきて、避けようとした赤土さんはガードにぶつかってしまおうというとんだとばっちりを受けたい。どっか入ってきたかは謎である。キヤーン!

100mダッシュ初回の飯島夏樹を思い出させる、落日のウイニングラン。

第1レースの15分後、15時30分第2レースの計測が開始され、コースは第1レース目とは逆のスタポーサイド(川上~川下)で行なわれることになった。風向きと波の方向を考えると、このコースの変更によりかなりの好記録が期待できそうだ。雲も切れて風はますますコンスタントに吹き始めた。ただ、辺りは西陽で赤みがかり時間の経過とともに気温も下がり、厳しい寒さが選手を襲うだろう。これが選手にどう影響するかが唯一心配された。

15時34分、再び風が上がり、風速は11~14m/sにまで達した。コースを変更したことにより、それまでアビームからやや上ぼりだったプロパーコースがアビームからクォーターで走れる為、記録が延びることが予想された。第1レースに続き、第2レースもトップで計測を終えた赤土はやはり第一レースの自己記録を大きく上回る55.300km/hを打ち出した。選手達は風を奪い合うように次々に出艇し平林真憲、岡田和夫がスタートでもつれるがなんとか平林がスタートし、助走では完璧な走りを見せ好タイムへの期待に瞬ぎャラリーが沸いたが、計測区間直前でノーズがめくれ上がり大きくロスタイム。ライバル達からもおもわず溜息が漏れた。しかし岡田はプロの意地を見せその直後の出走で59.801km/hという好記録を打ち出しトップに立つ。60km/hの壁ま

であと一歩というところまで来た。やはりコースの変更は選手にとって有利であった。それまで正面からぶつかりスピードを殺していた波が今度はそのパワーに後押しされるようになっとうなったのだ。小杉正光、堀野稔も続いて好調な走りを見せたが、トップには及ばなかった。照山幸子がスタートしたが計測区間後半でブローが途切れ、タイミングが合わずに記録もいまひとつ伸びなかった。午後16時30分を回ったところで風の強弱が激しくなり全体的にも若干風が落ち、特にスターティングエリアの風が落ちた為、選手は助走が取れずに苦しんだ。助走に苦しみ選手の中でボードのブレが全く無く、素晴らしい走りを見せたのは城和由里プロである。少ないブローをうまく乗り継いだ佐野文洋、タイミングよくいいブローを掴んだ秋田晴夫と続き、再び強いブローがコース上に入ってきた。

16時54分、コースの2/3をほぼ下らせて走った江宮慶治がとうとう60km/hの大記録を打ち出した。17時を過ぎた頃、ブローがかなりきつくなり飛ばされて激沈、セイルが引き込みきれずにセイルを開く選手が相次いだ。そんな中、17時09分ブローがバッチリ決まった瞬間、赤と青のセイルが水煙を上げながら疾走し観衆をざわめかせた。セイルワークスを駆る山形雅俊プロの記録は60km/hを完全に越え

ているであろうというのが観衆の大方の予想であった。記録はやはり60.504km/h! 昨年のスピードクイーンであった期待の養見樹はコース上で痛恨の沈。続いて待望の城和紀之プロ登場。第1レースの計測ではブローも決まり期待を真切らないハイスピードな走りを見せたが、手違いによるノーカウントという残念な結果であった。気を取り直して再走。加速時にはブローがあったものの不運にも、またもや計測区間でブローが消えてしまった。常に水面近くになくはならない城和の体が棒立ち状態になってしまった。結局記録は58km/h止りであった。その後も走行ラインのブローの強弱が激しく選手の判断を惑わせるような風であった。突然抜けるブローに悪戦苦闘しつつも17時30分を過ぎ、日も傾き始めた頃、彗星のごとく一枚のセイルが計測区間を駆け抜けた。セイルナンバーを見て誰だか分からない。フォームはガッチリ固まり、無駄な動きも無くスムーズな走りである。第1マークよりかなり下らせての走行。セイルナンバー1373は杉原裕史選手、記録はなんと61.962km/h。その後昨年のスピードチャンプ早川憲一がこの日始めての計測に向けて出艇したが、最後の最後まで風を待った彼を真切るかのようになりコース上にブローはなく、ついに61.962km/hの記録を破ることはできなかった。新チャンピオン誕生の瞬間だった。

Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed	Sail No.	Time	Speed
49	17	0:00:07.59	47.431km/h	61	1954	0:00:07.71	46.693km/h	73	39	0:00:07.98	45.113km/h
50	8880	-0:23:59.40	-0.153km/h	62	70	0:00:08.12	44.335km/h	74	20	0:00:07.49	48.064km/h
51	714	0:00:06.07	59.308km/h	63	117	0:00:05.87	61.329km/h	75	3773	0:00:06.91	52.098km/h
52	370	0:00:07.86	45.802km/h	64	197	0:00:07.07	50.919km/h	76	1373	0:00:05.81	61.962km/h
53	153	0:00:07.13	50.491km/h	65	33	0:00:06.30	57.143km/h	77	66	0:00:06.81	52.863km/h
54	2881	0:00:07.86	45.802km/h	66	21	0:00:06.19	58.158km/h	78	31	0:00:07.49	48.064km/h
55	46	0:00:00.00	#DIV/0!	67	8880	0:00:06.73	53.492km/h	79	781	0:00:00.00	#DIV/0!
56	288	0:00:06.83	52.709km/h	68	34	0:00:06.32	56.962km/h	80	955	0:00:00.00	#DIV/0!
57	13	0:00:05.95	60.504km/h	69	54	0:00:07.53	47.809km/h	81	504	0:00:07.65	47.059km/h
58	7370	0:00:06.44	55.901km/h	70	632	0:00:06.72	53.571km/h	82	955	0:00:07.33	49.113km/h
59	2	0:00:08.22	43.796km/h	71	3642	0:00:07.21	49.931km/h	83	16	0:00:06.07	59.308km/h
60	46	0:00:08.75	41.143km/h	72	73	0:00:07.11	50.633km/h	84	47	0:00:09.05	39.779km/h

NUCLEAR WIND OF GORGE

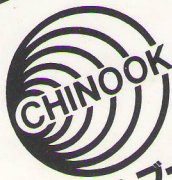
PROGRESSIVE COMPOSITES
CHINOOK
VISUAL SPEED
and
TOP SAILS



RIDER: S. AKADO
PHOTO by TAKI

BUILT BY
PROGRESSIVE COMPOSITES
COLUMBIA GORGE U.S.A.

9'0" 274cm X 56.5cm 6.25kg ¥310,000



E-9 スラロームブーム 153cm~198cm ¥42,500

TOP SAILS

RACE SL WING 6.0m² 460cm X 195cm ¥78,500



1001 VSL VISUELLE SEAT ¥22,500

1991 LES AILES CUP

レゼール・カップ

1991.9.1(SUN)

場所 福井県三国サンセットビーチ

エントリー募集中

コースレース
スラローム
詳しくはレゼールまで



LES AILES CO., LTD. 総輸入代理店有レゼール

カタログ資料をご希望の方は、右記までご請求下さい。〒913 福井県坂井郡三国町米ヶ崎5-7-7 ☎0776-82-0971 FAX0776-82-5971

こんな感じのジャッジ・システムの中で、フリースタイルが開催されることになった。出場選手は、11人。石原さん、中里尚雄さん、新城さん、タカさん(釜口)、レーサーの辻井さん、根本さんと、かなり濃縮されたメンバーが揃っている。ウェイブの大会で、このメンバーならばやる気もそがれるが、これはフリースタイルなのだ。

風は、吹いていた。

5.0m²~5.3m²ぐらいだが、かなりガスティで、ブローは4.7m²ぐらいだがそれが抜けると5.3m²でも厳しくなる。みんなも5.0m²~5.3m²をチョイスしている。

海面は、遙か沖のリーフで波が消されるため、カナハのインサイドをもうちょっとチョッピーにした感じだ。これじゃ高いジャンプは望めそうにない。さらにラッキーなことに、ニック・ベイカーが飛行機の都合で、沖縄入りできないという。最小の5.0m²をセットした僕は、道具の心配こそあるものの気合は入っていた。

コンテストは、ヒート時間5分。参加人数の関係で3人対戦で1人アップというマンオンマンのヒートが交じった変則的な形で進行する。

第1ラウンドが始まった。

1回戦の石原VS辻井で、早くも波乱が起きた。最初からバルカンやスポックを連発する石原さんに対し、自称フリースタイラー辻井さんはアウトサイドのバルカンを決めつつも要所で得意のインサ

イドフォワードを決める。新しいトリックを惜しみなく出した石原さんだが、それが単純な技の披露に思われたのだろうか、まさかの1回戦敗退になってしまった。本人も、まさかという表情で呆然と立ち尽くしていた……。

僕は、その敗因が同じ技にこだわった印象の悪さであるということに気付くはずだったが、尚雄さんにシメられた。

尚雄さんは、さすがに巧かった。新しいトリックは出してこないものの、インサイドからアウトサイドの間のワンピッチの中で確実な技をできるだけ多く披露し、しかも沈はしない。コンディションに合わせて風が強いとエア系を狙い、弱いとセイルトリックを織り交ぜ、完璧な組立てで“流れ”をつかんでいた。特に目を引いたのは、平水面フォワードループ。ほんのわずかなギャップでマストトップがまったく海面につかないループをメイクするのはさすがだった。

尚雄さんは、新城さんを破り、そのままのペースを崩すことなく決勝へ進出。一方、石原さんを破った辻井さんは、それまで決まっていたインサイドフォワードが不発に終わり、根本さんの前に屈してしまった。

決勝は、中里VS根本。

ある意味では異色だが、そんな雰囲気尚雄さんも感じたのか、ここで初めてリズムを崩し、あっさり負けてしまった。

↓自称フリースタイラーの辻井は、ダンスを踊るように軽やかに舞った。



↓根本は、健闘した。1R、2Rと連続ファイナル進出は、見事だった。



↓初のフリースタイルのミーティング。ヒート以上にみな熱心に聞き入っていた。

